説　　教　　イザヤ書53章5〜7節　　第一ペテロ書2章18〜25節

「主の御苦難」

２０１２・１０・２１（説教１２４３１４５３）

使徒信条の中には、主イエス・キリストの御業について 12 の動詞があります。順に申しますなら「①（主は）聖霊によりて宿り、②お生まれになり、③苦しみを受け、④十字架にかけられ、⑤死なれ、⑥葬られ、⑦陰府に降り、⑧よみがえられ、⑨天に昇り、⑩神の右に座し、⑪再び世に来られ、⑫生ける者と死ねる者とを審きたもう」。この 12 の事柄です。このように、実は使徒信条は非常に緻密な信仰の告白文なのです。全体でも 12 の項目に分けられるのですが、主イエス・キリストの御生涯（御業）についても 12 の部分に分けられるのです。言い伝えによればその 12 の項目には十二使徒が関わったことになっています。その歴史的な真偽はともあれ、そのことは使徒信条が使徒的な教会の信仰告白であることを表しているのです。

さて今朝、私たちがご一緒に心を留めたいのは「（主は）苦しみを受けられ」とある事柄です。これはラテン語では「パッスス」という言葉です。ここから例えば「マタイ受難曲」（マテウス・パッシオン）という表現が出てきます。この「マテウス・パッシオン」とは「マタイ福音書に基づき、キリストの御受難を覚える曲」という意味です。そこで、このラテン語“パッスス”の元の意味は「自分に責任がないにもかかわらず、一方的に他から押しつけられた苦しみ」ということです。つまり“パッスス”とは「強いられた苦しみ」というのが本来の意味なのです。それは、私たちが誰でもいちばん嫌がることではないでしょうか。自分に責任があるのなら我慢ができるのです。自分に原因も責任もないのに強制的に苦みを受けることは、私たちは耐えられないのです。それは人間として最も不自由な束縛状態を意味するからです。

それならばなおのこと、私たちの主イエス・キリストが「苦しみ（パッスス）を受けられた」とは実に驚くべきことです。イエス・キリストはまことの神の永遠の御子であられます。神そのものであるかたです。そのかたが、人間として考えうる最大最高の苦しみ、それも「強いられた苦しみ」を受けられたということ。言い換えるなら、その「強いられた苦しみ」の束縛に対して主は全く無抵抗であられたということは、驚くべきことではないでしょうか。ほんらい、神が神であるということは、何物にも束縛されない絶対に自由な存在であることです。苦しみにも死にも完全に無縁な絶対者として崇められるからこそ、神は神なのではないでしょうか。

ギリシヤ哲学で有名なアリストテレスは「神は全ての“パッスス”から完全に自由であるからこそ神である」と定義しました。言い換えるなら「パッスス」（御受難）を受けるような神はもはや「神ではない」ということです。神の名に値しないということです。そのことを中世のヨーロッパでは「不動の動者」という言葉であらわしました。神は何者によっても動かされることなく、むしろ全てのものを動かす「万物の第

一動因」であるというのです。だから他から「強いられた苦しみ」を受けることは、もっとも神らしからぬことだと考えられたのです。

それならば、私たちの主イエス・キリストは、私たちの救いのために人となられ、十字架への道を歩まれ、そして「死なれた」という事実によって、私たちの常識や知識がとうてい測り知ることのできない深みにおいて、神であられることを辞めたかたなのです。言い換えるなら、罪によって神の外に出てしまった私たちを救うために、神の御子キリストみずから「神の外」に出て下さった。それがキリストの御受難（パッスス）の意味です。キリストはまことの神であられる、その完全かつ絶対の自由において、ただ測り知れない愛によって、私たち全ての者のために「強いられた苦しみ」を甘受せられた。黙って引き受けて下さったのです。主イエスの自由とはそのような自由でした。ただ限りなき愛のゆえに、もっとも自由であられるかたが、最も恐ろしい不自由の中に身を挺して下さったのです。

覚えておられるかたはおられるでしょうか。もう 15 年ほど前の大晦日（12 月 31 日）未明のことです。その時は未だ古い礼拝堂と牧師館でしたが、午前 4 時頃に物凄い大音響が空から轟いたのです。その大音響によって家全体が震い動きました。落雷の数百倍もの凄まじい大音響でした。翌日の新聞の地方欄に「原因不明の自然現象」と出ていました。なぜ覚えているかと申しますと、夜が明けて私は妻に「ルターが修道院に入った理由がわかった」と申したのです。ルターという人は最初は法律を学ぶ学生でした。ところが休暇で故郷のアイスレーベンという町に帰省する途中、ものすごい雷雨に遭い、自分と同年代の青年が落雷によって死んだことを知らされるのです。この経験をきっかけとして、ルターは法律家になることを辞め、聖職者の道を歩む決意をするのです。そのときの気持ちがわかったように感じたのでした。

ルターが恐れたのは、ただ自分が「死ぬかもしれない」ということ（事実のリアリティ）ではありません。そうではなく、いつ死すべきか、それさえもわからない自分が、聖なる神の前に立ちうるであろうかという「信仰のリアリティ」の問題でした。人間としてもっとも大切なこと、知らねばならないこと、もっとも幸いなことを、自分は知らずに生きてきたのではないかと覚醒したのです。「死を見つめることこそ信仰の学校である」とルターは申しましたが、聖なる神の前に、罪にまみれた存在でしかない自分を思い、ルターは心の底から畏れを抱いたのです。これは、ルターひとりの自覚ではありますまい。私たちは自分を顧みれば顧みるほど、死に直面し、神に直面するとき、なにも備えができていないということに愕然とし、畏れるほかない存在なのではないでしょうか。礼拝生活のリアリティもその一点にかかわります。「今日の礼拝を休んでも、また次の週がある」と思っているうちは、私たちはまだ本当の“畏れ”を抱いていないのです。本当の生命を知らないのです。礼拝は一日一生のかけがえのない恵みの時です。説教を宣べ伝える者も、それを聴く者も、御言葉をまさに遺言（テスタメント）として聴くべく招かれている。まさに「一期一会」の主なる神との出会いの時なのです。

現実に、今日ここで礼拝を共に献げている人が、その次の週には天に召されているということが起るのです。有名な話があります。ある神学者が夢を見た。たくさんの新しい墓が並んでいた。そのどの墓碑銘にも同じ文字が刻まれていた。「なんということだ、もう死んでしまったのか！」。私たちは「酔生夢死」などと言いますが、人生はその程度の幻想は簡単に砕かれるのです。大切なことはただひとつではないでしょうか。それは私たちは今ここに「主の年」を生きている。「キリストの時」を生かしめられているという事実です。主が十字架のご苦難によって贖って下さった歴史であり私たちなのです。だから大切なことは、私たちがいつどのような時にも、永遠の御国に属する者として、御言葉に養われつつ、まことの礼拝者として、この歴史の歩みを続けてゆくことです。それこそ主イエス・キリストの贖いの恵み、私たちのための御受難（パッスス）の恵みのもとに、健やかに立ち続けていることです。

昔のヨーロッパの修道院の入口に「汝の死すべきことを覚えよ」（メメント・モリ）と刻まれていました。今日でもその文字を見ることができます。しかしそれはただ単に、私たちはいつか死ぬのだ…という事実の確認ではありません。むしろ「汝のために死にたまえる主イエス・キリストの死を覚えよ」という標語なのです。まことに「死すべき」私たちのために、不死なる永遠の神の御子が、測り知れぬご苦難を身に負うて下さった。私たちの罪のための贖いを、このかただけが成し遂げて下さった。神の外に出てしまった私たちを救うために、このかただけが「神の外」に出て下さった。まさにルターの言葉を借りるなら「十字架においては如何なる理性も理解不能なことが起っている」のです。神が神でなくなられたという出来事です。神なき私たちの神となられるために、神が神でなくなられたという出来事が、あの十字架において起ったのです。

私たちの教会の大切な信仰の遺産である「ハイデルベルク信仰問答」の問 37 にこのように告白されています。「（問）『苦しみを受け』という言葉によって、あなたは何を理解しますか？」「（答）　キリストがその地上での全生涯、とりわけその終わりにおいて、全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂とに負われた、ということです。それは、このかたが唯一のいけにえとして、御自身の苦しみ（パッスス）によって、わたしたちの体と魂とを永遠の刑罰から解放し、わたしたちのために神の恵みと義と永遠の命とを獲得してくださるためでした」。まさにここに告げられているように、私たちの主イエス・キリストは十字架のご苦難によって私たちのための「いけにえ」（あがない）　を成し遂げて下さったのです。本来は私たちが担わねばならなかった「罪に対する神の御怒り」をも、主は身代わりになって担い取って下さった。だから私たちはもはや何も恐れる必要はないのです。キリストが私たちを「体と魂において」すなわち、私たちの全存在をまるごと贖い取って下さったからです。そして私たちと永遠に共にいて下さり、愛の御手から離れない者としていて下さるのです。

この救いの恵みの喜びを語るとき、使徒信条は何よりも、このかた（主イエス・キ

リスト）はそのご生涯の全てを通して「パッスス」すなわち「苦しみを受けたもうた」のひと言に尽きる歩みをして下さったのだと語るのです。キリストの全生涯がこのひと言に集約されているのです。そのようにして、私たちを教会によってご自身の永遠の義と生命にしっかりと結び合わせ、変わることのない御国の民となして下さったのです。ベツレヘムの馬小屋での御降誕から十字架の死に至るまで、このかたの歩みは全て私たちのための救いの歩みであられた。私たちの救いの確かさは十字架のキリストの御苦難の確かさなのです。

私たちは人生の日々の中で、ときに言いようのない「恐れ」を抱きます。困難や悩みに直面するとき、家族や自分が病気になるとき、人間関係の中で不当な苦しみを受けるとき、自分が本当に孤独であり、弱く脆い存在であると嘆くのです。しかしそうではありません。主イエス・キリストは、私たちの人生のいちばん深い闇の中にこそ、十字架の測り知れぬ恵みをもって来て下さったかたなのです。ご自身の平安の内に、私たちの朽つべき存在のあるがままを、かき抱くように受け止めて下さった唯一の救い主なのです。死の現実の中にさえ尽きぬ生命を与えて下さった「主」なのです。そのためにこそ主は、私たち全ての者のために限りないご苦難をお受けになった。私たちの存在の重みを罪の絶望もろともに十字架に担い取って下さったのです。この救い主なるキリストを信じ、この主の測り知れぬ愛と祝福の内に新しい生命を戴いている者として、私たちは喜びと感謝の礼拝を献げ続けます。この礼拝なくして私たちの生活はありえないからです。そこにのみ、本当に自由な、新しい、希望の人生が造られてゆくからです。ご受難の主に結ばれた幸いと平安を、主の聖徒たちから、教会に連なる私たちから、奪いうる力は存在しないのです。

改めて、ペテロ第一の手紙 2 章 22 節以下を心に留めましょう。「キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自身の実に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである」。いま私たち全ての者が、このキリストのご受難の恵みのもとに立っているのです。そしてこの恵みのもとに、私たちは生き続けるのです。